The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山口方言の文末に見られるジャについて ： 断定辞のジャと文末詞のジャ
Author(s)	舩木, 礼子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2001, 3, p. 94-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23183
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第3号（2001年3月）94-109

山口方言の文末にみられるジャについて
——断定辞のジャと文末詞のジャ——

松木礼子

【キーワード】断定辞、文末詞、新規情報の導入、確認要求、ジャ

【要旨】

山口方言の文末にあらわれるジャには断定辞のジャと文末詞のジャの二つが混在しているが、これらは生起する文法的環境、音調、意味・機能の諸側面から区別できる。断定辞のジャは、体言に後接し、文末イントネーションが下降となるもので、それまで話し手が認識していなかったある事態を、確定した事態として発話時に新規に導入したことを表す。これに対し、文末詞のジャは体言にも用言にも後接し、文末イントネーションが上昇および上昇下降となり、標準語の「ではないか」のⅠ類にほぼ相当する。なお、文末詞ジャが上昇下降イントネーションを伴う場合、上昇下降イントネーションが「聞き手も共有したかどうか確認を求める」機能をもつため、意味は「潜在的共有知識の活性化」に特定される。

1. 記述の対象と方法

1.1. 記述の対象

山口方言の文末には頻繁にジャという形式が用いられるが、このジャは断定辞[1]と標準語の「ではないか」にあたるものの二種が同じ形で現れたものと思われる。以下の例をみられたい。（以下、例文の↓や↑、↑↓はそれぞれ文末イントネーション[2]が下降調、上昇調、上昇下降調であることを表す。文末イントネーションについての詳細は2.1.および3.1.で述べる。なお、例文の後部の（）は標準語訳である。）

(1) あれ、雨ジャ↓。（雨だ）

(2) ほら、あいつ毎週競馬に行くジャ｛↑／↑↓｝。（行くじゃないか／行くだろ）

(3) 何やってんの！　そんなことしてはだめジャ↑。（だめじゃないか／だめだろ）

従来、山口方言の断定辞はジャであるといわれており、実際に（1）などの例に限ればこのことは肯首できる。だが（4）や（5）を見ると、山口方言の断定辞のジャは標準語の断定辞の「だ」と完全に置き換え可能なわけではなく、何らかの文法的性格のちがいがあると考えられる。

(4) A：あれは何｛カ(ネ)／*ジャ｝。（何｛φ／だ｝）
　　B：ああ、あれは桜｛ヨ／*ジャ／*ジャヨ｝。（桜｛よ／だ／だよ｝）

(5) ほら、見てごらん、あれが瀬戸大橋｛ヨ／*ジャ／*ジャヨ｝。（瀬戸大橋｛よ／だ／だよ｝）

断定辞とおぼしきジャの、常に標準語と同じように断定辞を用いているわけではないという特徴に関しては、熊本方言についての秋山（1983）の指摘が参考になる。

（イ）肥筑方言でも熊本方言では、断定終止法（共通語文法でのもの）は存在しないに近い

（ロ）断定終止法（共通語文法）の欠如に代わる形として、断定辞を零記号にして、タイ・バイ・ナー・ネーなどの終助詞によって終結し、形の上では終助詞が断定終止の機能を受け持つ形をとることが基本の一つになっている

（ハ）終助詞による方法のほかに、元気ナ（コトダ）、元気ナモン、元気ノヨサ、のように、体言句的方法、つまり名詞止め詠嘆的方法をとることが優勢であること

秋山（1983）

秋山の指摘から、(4) や (5) のように断定辞が文末に生起しない場合があるという特徴は山口方言だけのものではないことがわかる。しかし、(1) のように山口方言には断定辞の「終止法」が全くないわけではないことや、熊本方言と山口方言では終助詞の形式やその意味が異なること、山口方言にサ詠嘆法がないことなどの違いがあるので、標準語と比べるだけでなく他方言との異同をみるためにも、山口方言の断定辞について文末の用法を記述することは意義があると考える。

「ではないか」に相当すると思われるジャについては、藤田・田原（1990:90）が「補注」で若干ふれている。それによると、このジャは「活用語にも広く接続して、感動や否定的評価をともなう確認表現など主情性の強い表現を構成するもの」で、「中部地方および関東中央部のジャン（あるいはジャンカ）」や「関西中央部のヤン（あるいはヤンカ）」とほぼ同じ働きを持つものとされている。このことをふまえ、藤田・田原（前掲）の調査では、調査文に「あの車はすごく速い（感動表現）」や「なんだ、これはあいつの本じゃないか（否定的評価をともなう確認表現）」を用いている。ただし山口県内の方言使用の動態をみることが調査の主眼であったためか、「60 代にも使用がみられることから少なくとも半世紀以前からある言い方だと推定される」との指摘はあるものの、文末詞ジャの意味・用法について詳しく記述することはせず、「かなり特殊な言い方だと考えられる」と述べるにとどめている。

本稿では、山口方言の文末にみられるジャという形式について、意味によって暫定的に断定辞のジャと「ではないか」に相当する文末詞のジャとに区別した上で、それぞれの生起する環境や音調の特徴、意味・機能などを記述することを試みる。まず 2. で断定辞のジャについて、次いで 3. で文末詞のジャについて述べることにしたい。

なお、断定辞の文体差のある変種にデスがあるが、本稿ではとりあつかわない。

1.2. 音声的環境によるジャの変種について

記述対象としての文末のジャについて、音声的な面での補足をここでしておきたい。

山口方言のなかでも広島よりの地域や九州よりの地域では、若年層の一部で断定辞にヤが使われているとの報告があるが（藤田・田原 1990 など）、筆者の出身地である山口東部（熊毛・玖珂）地域では断定辞、文末詞ともに若年層であってもジャで安定している。断定辞のバラエティに関わる音声的環境について、奥能登や富山では撥音に後接する場合にヤになりやすいことが報告されているが（愛宕 1969、小西 1999）、山口東部方言では、ジャの標準的な発音より条件異音的に歯茎化・口蓋化することはあったとしても、こうした環境によってジャが音韻的に異なるダやヤになることはない。

また、本稿で用例を示す際はすべて「ジャ」と表記しているが、文末に現れるジャは「ジャー」のように二拍に伸びることが一般的で、2.1.および 3.1.で説明する下降、上昇、上昇下降という三種の文末イントネーションのどれかを必ず伴う。

1.3. 記述の方法

本稿は筆者の内省によって記述する。したがって、正確には青年層の山口東部（熊毛・玖珂）方言の文末にみられるジャの記述となる。筆者の略歴は以下のとおりである。また、筆者には外住歴があり体系の簡略化などの生じている可能性があるため、筆者の内省で判断しづらい例文については、県外居住歴のない 19 歳男性に適格性を確認した。

筆者略歴：1973 年生まれ～1992 年（高校卒業）まで山口県熊毛郡田布施町に居住
1992 年 4 月以降は京都市に居住

2. 文末にあらわれる断定辞ジャ

2.1. 断定辞ジャの生起する文末の文法的環境

まず、山口方言の文末のジャが標準語の「ではないか」「じゃない（か）」（田野村（1988）の第 1 類）に置き換えられない場合、暫定的にこれを断定辞としておく。このような基準で抽出した山口方言の文末の断定辞ジャは、以下のような文法的環境で用いられる[3)]。

①接続面の特徴：名詞相当の語（体言）に後接し、名詞述語を形成する。

(6)　ポチ、どこに行ったのだろう……わかった、山ジャ↓。（名詞）

(7)　どうしたらいいのかな……そうか、このスイッチを押すんジャ↓。（準体助詞）

ただし、体言のなかでも疑問詞は疑問詞自体の意味と山口方言の断定辞ジャの意味とが相容れないため共起しない。

②標準語と同様、山口方言の断定辞ジャも、判断のモダリティ形式と共起しない。

(8)　＊あの人は学生ジャ｛ジャロー／ミタイナ／ヨーナ／ソーナ／ラシー｝。

③音調面の特徴：文末の断定辞ジャは必ず下降イントネーションを伴い、上昇、上昇下降などのイントネーションになることはない。

ここでいう下降イントネーション（本稿では↓で表示）とは、ジャが前の拍と同じ（前

の体言のアクセントが低起無核である場合）かそれより低いピッチからさらに下がるイントネーションである。山口方言の文末の断定辞ジャは標準語の「だ」とは異なり、平調（本稿では語アクセントに由来するピッチの上下現象以外にさしたる音調の変化がないイントネーションをこう呼ぶ）は認められない。

2.2. 文末にあらわれる断定辞ジャの意味・機能

2.2.1. 新規情報の導入のマーカー

山口方言の文末にあらわれる断定辞ジャは、(9) ～ (13) のように、それまで話し手が認識していなかったある事態を、確定した事態として発話時に話し手が新規に導入したことを表している。ここでいう「導入」とは、話し手が見たり聞いたりして得た知覚的な情報（(9) (10) (13)）や、推量などの心的活動を通して得た情報（(11) (12)）を、確定的なものとして話し手が知識の中に取り込むこととしておく。(用例中の〔〕は文脈設定のための補助情報である。)

(9)　〔外に出て、初めて雨に気付いて〕あれ、雨ジャ↓。(雨だ)（＝ (1)）

(10)　1：〔室内で〕なんだかパラパラと音がしているなあ。
　　2：〔外に出て、初めて雨が降っているのを確認して〕やっぱり、雨ジャ↓。(雨だ)

(11)　〔外に出て、水たまりができているのを見て初めて雨が降ったことに気付き〕あれ、雨が降ったんジャ↓。(降ったのだ)

(12)　1：ポチ、どこに行ったのだろう。
　　2：〔以前にもポチが逃げたときに山にいたことを思い出して〕わかった、山ジャ↓。(＝ (6))

(13)　〔一人で山歩きをしていて〕ああ、また沢ジャ↓。(沢だ／沢かぁ)

したがって、一般則を述べる場合（(14) (15)）などのように、ある事態を以前から認識し、すでに「ある事態」として導入済みだった場合には、断定辞ジャは使用できない。

(14)　＊ヒトは哺乳類ジャ。(哺乳類だ)

(15)　＊古書は毎年、虫干じするものジャ。(虫干しするものだ)

また、すでに得ていた情報を思い出して再認識する場合（(16)）も不適格である。

(16)　＊〔目の前の写真を見て〕ははあ、これが例の写真ジャ。(写真か)

また、断定辞ジャは聞き手めあての発話では使用できない（(17)）。話し手が初めてその事態を認識し確定情報として導入することと、その情報を話し手がすでに知っている情報として聞き手に伝えることは、認知的操作として同時におこなえないものである。断定辞ジャは、こうした認知的操作のうち前者のみを表す形式となっているのであろう。断定辞ジャが文末詞ヨと共起しないこと（(18)）も、ヨがもつ「聞き手に教える」という伝達行為上の機能と断定辞ジャの意味とが相容れないためだと説明できる。

(17)　A：お父さん、これは何？

　　＊B：うん、それは山ジャ。(山だ)

(18)　A：お父さん、これは何？

　　＊B：うん、それは山ジャヨ。(山だよ)

なお、断定辞ジャと文末詞ネは共起するが((19))、これについては「ジャネ」を一つの文末形式とみるのではなく断定辞ジャにネが後接しているとみなす立場をとると解釈しやすい。つまり、断定辞ジャによって話し手がその場で判断したことを示したあとに、聞き手に対してその判断が聞き手と同じかどうかの確認（同意）をネによって求めていると解釈するのである。ネのイントネーションは上昇と上昇下降のどちらでもよいが下降ではないということも、この解釈の傍証となるだろう。

(19)　A：うわあ、高い山ジャネ｛↑／↑↓／＊↓｝。(山だね)

　　B：ほんとジャネ｛↑／↑↓／＊↓｝。(本当だね)

いわゆるノダ文でも、発話時にその事態を確定的なものと判断して導入する、聞き手めあての発話でないタイプのノダ文（野田 1997 の「対事的ムードのノダ」にあたる）には断定辞ジャが共起する。

(20)　山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんジャ↓。(あるんだ)〈「対事的ムードのノダ・関係づけ」〉

(21)　そうか、このスイッチを押すんジャ↓。(押すんだ)〈「対事的ムードのノダ・非関係づけ」〉(＝(7))

一方、ノダ文のうち野田（1997）の「対人的ムードのノダ」にあたるものの場合、ジャが新規情報の導入のマーカーであって聞き手めあて性がきわめて弱いことを考えれば、対人的ムード」のノダ文とジャが共起しないことが予想できる。

(22)＊僕、明日は来ないよ。用事があるンジャ↓。(あるんだ)〈「対人的ムードのノダ・関係づけ」〉

(22) は、標準語では「あるんだ↑」のように上昇イントネーション（郡 1997 のいう「強調上昇調」）も用いるが、山口方言では「あるンジャ↑」も不適格であり、この場合は (22') のように「～ンチャ↑」が用いられる[4]。

(22')　僕、明日は来ないよ。用事があるンチャ↑。(あるんだ)

しかし「対人的ムードのノダ」のなかには、不適格とはいいづらい例も存在する。

(23)？このスイッチを押すんジャ↓。(押すんだ)〈「対人的ムードのノダ・非関係づけ」〉

このことについては、次節で詳しくみていくことにしたい。

2.2.2.　断定辞ジャの語用論的な用法について

前節で述べたように、山口方言の断定辞ジャは、その事態について話し手が発話時に新規に情報を導入したことを表す形式であり、聞き手めあて性はきわめて弱いものである。

ところで、標準語では（24）（25）のように、文脈で決まるモダリティ的意味が断定辞につきやすい。

（24）　ねえちゃん、ビールだ。〔＝ビールを持ってこい〕

（25）　〔注文をきかれて〕僕はうなぎだ。〔＝注文はうなぎだ／うなぎを注文する〕

しかし山口方言では、こうした文脈で断定辞ジャを用いるのは不適格である（（24’）（25’））。

（24’）＊ねえちゃん、ビールジャ↓。

（25’）＊〔注文をきかれて〕僕はうなぎジャ↓。

ただし、男性が非常にきつい口調で命令する場合ならば、以下の例のようにジャが使われることもあるように思う。

（26）？〔もたもたしている聞き手に〕スイッチジャ↓。（スイッチだ！）〔スイッチを押せ〕

（27）？このスイッチを押すんジャ↓。（押すんだ！）〈「対人的ムードのノダ・非関係づけ」〉

命令表現であるこれらの例文は、例えば「火事になったら警報のスイッチを押すものだ」といった一般則や「水を止めるためにはこのスイッチを押す」といったある決められた対処の方法などの情報を話し手がすでに認識済みであることが前提となる。こうした一般則や対処の方法などの情報を述べる際に断定辞のジャを用いることは、これまで説明した通り、断定辞のジャが新規情報の導入のマーカーであるために不可能である。また、先述のように断定辞のジャは聞き手めあての発話では使用できない点からも、（26）（27）は不適格となるはずである。

（26）（27）の適格性判断がぐらつく原因として、ジャの意味以外に二つの要因が考えられる。まず、標準語の「～のだ」の用法が影響している可能性がある。二つ目として、語用論的な効果が生じている可能性が挙げられる。話し手がその一般則や対処の方法をそれまで知らなかったとすれば、ジャを用いて今気付いた「すべきこと」について聞き手を気にせず口にすることも、それが聞き手に聞こえることも特に問題とはならない。このことを応用し、話し手が実際はすでに認識済みの一般則や対処方法などの情報を知らなかったようにふるまって、発話時にあたかも初めて気付いたかのように断定辞ジャを用いて発話すると、この一般則や対処方法を発話時に認識していない聞き手に対して、今すべきことをそれとなく認識させ、行動に移らせるという語用論的な効果が生じた可能性がある。発話媒介行為が発話時直後に行われるものでない場合、つまり命令された行為が命令を受けた現場ですぐに行われるものではない場合に断定辞ジャが不適格になる（28）のような例は、この解釈を補強するものといえよう。

（28）＃必ず明日、電話するんジャ↓。（電話するんだ）

しかし、こうした解釈はまだ決定的なものではない。今後改めて考えていく必要があるだろう。

3. 文末詞ジャ

3.1. 文末詞ジャの生起する文環境

山口方言の文末のジャが標準語の「ではないか」「じゃない（か）」（田野村 1988 の第 1 類）にほぼ置き換えられる場合、暫定的にこれを文末詞としておく。この場合、山口方言の文末詞ジャの生起する文環境について、以下のような特徴を指摘できる。

①接続面の特徴：文末詞ジャは体言だけでなく形容動詞、形容詞、動詞、助動詞などの用言にも後接し、文の末尾に位置する。なお、山口方言の文末詞ジャは、標準語のジャナイカは共起しない推量の助動詞ジャロウ／ウ・ヨウとも共起する（(32)）。

(29)　体言：おっ、誰かと思ったら○○さんジャ↑。（○○さんじゃないか）

(30)　形容詞：どうしたの、ずいぶん顔が白いジャ↑。（白いじゃないか）

(31)　動詞：ほお、金賞か。おまえもやるジャ↑。（やるじゃないか）

(32)　助動詞：多分あいつは｛打つジャロージャ／打トージャ｝↑。（打つだろうよ、ねえ[5]）

したがって、用言に後接するジャは自動的にすべて文末詞といえるのだが、体言に後接するジャについては文脈や文末イントネーションによって断定辞なのか文末詞なのかを判断しなければならなくなる。

②用言とはいっても、ジャは命令、依頼、意志、勧誘などのデオンティックな表現とは共起しない。

(33) 命令：＊おまえが行けジャ。（＊行けじゃないか）

(34) 依頼：＊百円貸してくれジャ。（＊貸してくれじゃないか）

(35) 意志：＊よし、僕が行コージャ。（行こうじゃないか）

(36) 勧誘：＊一緒に行コージャ。（行こうじゃないか）

③音調面の特徴：体言に文末詞ジャが接続する場合には、文末イントネーションが上昇（↑）、上昇下降（↑↓）のどちらかとなり、下降（↓）にはならない。

本稿でいう上昇イントネーションとは、直前の拍と同じか低いピッチで始まり急激に上昇するイントネーションである。郡（1997）は上昇イントネーションを「疑問上昇調（⤴）」と「強調上昇調（↑）」とにわけているが、本稿の文末詞ジャの分析に限っては、「疑問上昇調」と「強調上昇調」の間に上昇下降イントネーションで弁別されるほどの大きな意味的・機能的差異は見いだせなかったため、これらをわけることはせず、どちらをも含んだものとして上昇イントネーションと呼ぶことにした。

また上昇下降イントネーションとは、森山（1989）の「急激な下降」、橋本（1992）の「長く急激な下降イントネーション」、郡（1997）の「上昇下降調」、菅（1999）の「高接

下降イントネーション」とほぼ同じ音調現象をさし、「前の拍よりも際だって高く始まり、その後急激に下降するイントネーション」（菅　1999）である。なお本稿は、菅（1999）と同様に、上昇下降イントネーション（↑↓）はある形式に固有の文末イントネーション・パターンではなく、その文を構成する形式や構文による意味の上になんらかの意味を付加あるいは補足したり、形式の意味と複合して新たな意味を生み出すものと考えている。

文末詞ジャが上昇となるか上昇下降となるかは意味によってきまり、例えば（37）A1は上昇下降、（37）A3は上昇となるが、その逆は不自然に感じられる。この意味のちがいについては次節で詳しくみることにする。

（37）　A1：去年の球技大会の時、焼き肉を食べたジャ↑↓。（食べたじゃないか）
　　B2：そうだったっけ？
　　A3：ええ、忘れちゃったの？「炭屋」で食べたジャ↑。（食べたじゃないか）

なお、推量の助動詞ジャロウ／ウ・ヨウに文末詞ジャが後接する場合、上昇イントネーションは共起するが上昇下降イントネーションは共起しない。これにも、文末詞ジャとイントネーションのそれぞれの意味が関わっていると思われる。

（38）＊A1：次の打席であいつはヒットを｛打つジャロージャ／打トージャ｝↑↓。
　　B2：そうかなあ？　あいつ、今日は調子悪そうだよ。
　　A3：いや、あいつならきっと｛打つジャロージャ／打トージャ｝↑。（打つだろうよ、ねえ）

3.2.　山口方言の文末詞ジャの意味・機能

山口方言の文末詞ジャは、標準語の「ではないか」「じゃない（か）」と意味・機能の上である程度対応しているが、異なる点も少なくない。本節では、まず標準語の「ではないか」と文末詞ジャを対照してその異同を確認した上で（3.2.1.）、文末詞ジャの「ではないか」と異なる意味・用法について例文を見ながら分析することにする（3.2.2.～3.2.5.）。

3.2.1.　標準語の「ではないか」と山口方言の文末詞ジャの意味・機能の異同

標準語の「ではないか」「じゃない（か）」の意味・機能については、当該研究の画期となった田野村（1988）の第1類・第2類と、これをさらに細分化して確認要求的表現について深めた三宅（1996）の分析枠を参照する。用語は主に三宅のものを使用する（ただし、本稿では方言形式と区別するために標準語の形式は「」でくくって平仮名表記しているため、用語は三宅のものに従うが、これ以降も標準語形式は「ではないか」、「だろう」、「ね」などと表記する）。

まず、田野村（1988）および三宅（1996）の分析枠をまとめると表1のようになる。なお、本稿ではジャを記述の対象としているのだが、標準語の研究では確認要求表現の諸特徴をひろくとらえるために「ではないか」と推量形式「だろう」や文末詞「ね」が取りあ

げられ、すでに「ではないか」との微妙な意味のちがいが指摘されている。意味・機能のちがいやイントネーションの特性を分析する上で、似たような用法を持つ他形式は参考になるので、本稿でも推量形式ジャロウ／ウ・ヨウや文末詞ネを視野に入れ、これを随時参照しながらジャの用法を考えていきたい。

【表 1】標準語の場合

三宅（1996）			田野村（1988）	「だろう」	「ではないか」		「ね」
					Ⅰ類	Ⅱ類	
確認要求	命題確認の要求（含「推測」）		第２類	○		○	○
	知識確認の要求	潜在的共有知識の活性化	第１類	○	○		
		認識の同一化要求		○	○		
弱い確認要求（含「驚きの表示」）					○		○
同意要求							○

表 1 の分析枠を山口方言の諸形式にあてはめると、表 2 のようになる。

【表 2】山口方言の場合

意味・機能（三宅 1996） ＼ 形式			ジャロ	「ではないか」				イネ	ネ
				ジャ↑	ジャ↑↓	ジャナイン	ジャナイカネ		
確認要求	命題確認の要求（含「推測」）		↓／↑ ○	×	×	○ 用言は×	↑↓○ 対聞手は??	↓／↑ ○	×
	知識確認の要求	潜在的共有知識の活性化	↑↓○	○?	○	×	↓○	↑↓○	×
		認識の同一化要求	↓／↑ ○	○	×	×	↓○	×	×
弱い確認要求（含「驚きの表示」）			×	○	×	×	↓○	×	↑↓○
同意要求			×	×	×	×	×	×	↑○

○はその形式がその意味・機能をもつことを、×はもたないことを示す。
?は使用するが多少不自然な場合もあること、??は非常に不自然なことを示す。
↑／↑↓／↓はその形式がその意味で用いられる場合の文末イントネーション。

表 1、表 2 の対照から、「ではないか」と文末詞ジャの意味・機能に関して、以下の相違点が指摘できる。

① 標準語では「ではないか」がⅠ類、Ⅱ類に使われ、Ⅱ類は用言に後接しないという形態的特徴と文脈とによってⅠ類とⅡ類を区別する。一方、山口方言ではジャとジャナインという形態のちがいでⅠ類とⅡ類が分かたれている。

②山口方言ではイントネーションのちがいが意味の弁別に関わっている。

③標準語では、確認要求的表現を分析する上で「ではないか」以外に「だろう」と「ね」があげられている。それらの意味・機能を山口方言の「ではないか」相当の形式以外と対照すると、推量形式ジャロウ（ウ・ヨウを含む）はほぼ標準語の「だろう」と同じだといえるが、標準語の「ね」に対してはネとイネという二形式があり、何らかの機能分担がある。

次節からは、これらの相違点を生み出している山口方言の文末詞ジャの意味・機能の分析をおこなう。

3.2.2. 形式による弁別――Ⅰ類のジャとⅡ類のジャナイン

山口方言では、Ⅰ類にはジャが、Ⅱ類には（39）～（42'）のようにジャナイン（あるいはジャナインカ）が用いられている。ジャナインが上昇イントネーションをとることはなく、またジャナイやジャナイカのように準体助詞に相当する「ン」がないものは方言形式と認め難い。

(39)　あいつ、もしかして男ジャナイン↓。(男じゃない（の))

(40)　あいつ、もしかして行ったンジャナイン↓。(行ったんじゃない（の))

(39')　＊あいつ、もしかして男ジャ。

(40')　＊あいつ、もしかして行ったンジャ。

(41)　〔聞き手に〕おまえは学生ジャナイン↓。(学生じゃない（の))

(42)　〔聞き手に〕おまえは行ったンジャナイン↓。(行ったんじゃない（の))

(41')　＊〔聞き手に〕おまえは学生ジャ。

(42')　＊〔聞き手に〕おまえは行ったンジャ。

ちなみに、山口方言ではⅢ類にジャナインカが用いられる。標準語と同様、出自である「ではない（の）（か）」に近い形式がⅢ類とⅡ類に用いられ、これが音声的な融合や省略を経て成立したと考えられる形式がⅠ類に用いられている点で、Ⅰ類に用いられる形式は文末詞として意味的にも形式的にも文法化がすすんだものだといえるだろう。

3.2.3. 勧誘表現、意志表現と文末詞ジャについて

山口方言の文末詞ジャが命令、依頼、意志、勧誘などのデオンティックな表現形式と共起しないことについては 3.1.でも述べたが、標準語の「ではないか」や「じゃないか」は意志表現や勧誘表現でも用いられる。本節では、意志表現や勧誘表現とジャが共起しない点について考えてみたい。

文末詞ジャは意志表現や勧誘表現とは共起しないが（(43)（44)）、ジャナイカネ↓であれば多少不自然ながらも用いることができる（(43'）（44'))。

(43)　＊誰も行かないのか？　よし、そんなら僕が行コージャ（行こうじゃないか）〈意志〉

(44)　＊一緒に行コージャ（行こうじゃないか）〈勧誘〉

(43')　？誰も行かないのか？　よし、そんなら僕が行コージャナイカネ↓（行こうじゃないか）〈意志〉

(44')　？一緒に行コージャナイカネ↓（行こうじゃないか）〈勧誘〉

なお、普通、ジャのかわりに使用されるのは別の文末詞であるワやヤである（(45)（46))。このうちヤは命令表現や依頼表現にも用いられる（(47)（48))。

(45)　よし、僕が行くワ。（行こう、行くよ）〈意志〉

(46)　一緒に行コーヤ。（行こうよ）〈勧誘〉

(47)　おまえが行ケーヤ。（行けよ）〈命令〉

(48)　百円貸シテクレーヤ。（貸してくれよ）〈依頼〉

このように、ジャが別の文末詞であるワやヤなどと截然と分けられていることから、山口方言の文末詞ジャはデオンティックな性格を全く持たないモダリティ形式と位置づけられていることがわかる。また、ジャよりも迂言的ともいえる形式であるジャナイカネ↓が意志表現や推量表現に使える点から、ジャは文法化を一層すすめて、ジャナイカネ↓などよりもその使用範囲を限定したものになっているといえるだろう。

3.2.4.　イントネーションによる機能の弁別——上昇下降イントネーションについて

山口の文末詞ジャは「知識確認の要求」と「弱い確認要求」（「驚きの表示」を含む）に用いられるが、文末イントネーションが上昇下降（↑↓）になるとジャの意味が「知識確認の要求」のうち「潜在的共有知識の活性化」に特定される。

〈上昇イントネーション〉

(49)　あれ、あいつも来ているジャ↑。（来ているじゃないか）

(50)　おっ、誰かと思ったら山田さんジャ↑。（山田さんじゃないか）

(51)　どうしたの、ずいぶん顔が白いジャ↑。（白いじゃないか）

(52)　わあ、田中さんたらすごい食欲ジャ↑。（すごい食欲じゃないか）

（三宅「弱い確認要求」（「驚きの表示」を含む））

(53)　何言ってるの！お前も行ったジャ↑。（行ったじゃないか／行っただろう）

(54)　おいおい、ここの責任者はお前ジャ↑。（お前じゃないか／お前だろう）

（三宅「（知識確認要求のうち）認識の同一化要求」）

(55)　ほら、あの人はよく温泉に行くジャ↑。（行くじゃないか／行くだろう）

(56)　ほら、あの橋をわたったら隣町ジャ↑。（隣町じゃないか／隣町だろう）

（三宅「（知識確認要求のうち）潜在的共有知識の活性化」）

〈上昇下降イントネーション〉

(49') ＊あれ、あいつも来ているジャ↑↓。（来ているじゃないか）

(50') ＊おっ、誰かと思ったら山田さんジャ↑↓。（山田さんじゃないか）

(51') ＊どうしたの、ずいぶん顔が白いジャ↑↓。（白いじゃないか）

(52') ＊わあ、田中さんたらすごい食欲ジャ↑↓。（すごい食欲じゃないか）

(53') ＊何言ってるの！お前も行ったジャ↑↓。（行ったじゃないか／行っただろう）

(54') ＊おいおい、ここの責任者はお前ジャ↑↓。（お前じゃないか／お前だろう）

(55')　ほら、あの人はよく温泉に行くジャ↑↓。（行くじゃないか／行くだろう）

(56')　ほら、あの橋をわたったら隣町ジャ↑↓。（隣町じゃないか／隣町だろう）

なお、「認識の同一化要求」の文脈でも上昇下降イントネーションが非常に不自然ながら適格であるように感じることがあるが（(53') (54')）、これらの例文が上昇下降イントネーションになると、聞き手も知っているはずの話し手と同じ情報・知識を思い出させることによって話し手と同じ認識に至らしめる表現になってしまうので、文脈設定によって「認識の同一化要求」にも「潜在的共有知識の活性化」にもなる例文が存在するというべきだろう。次に示す（57）のように、聞き手も知っているはずでしかも話し手と同じである情報や知識がない文脈を設定すれば、上昇下降イントネーションと「認識の同一化要求」が共起しないことがわかるであろう。

(57)　A：大きなねこだねえ。

B：ばかだね、これはたぬきジャ｛↑／＊↑↓｝。

菅（1999）は松山方言の分析で、上昇下降イントネーション（菅の用語では「高接下降イントネーション」）の後には聞き手の反応をみるためのポーズが必ずおかれることや、話し手は自分の発話を続ける意志をもっていて発話のターンは握ったままであることから、上昇下降イントネーションの機能を「当該の発話がこれから述べる内容の「前置き」であることをことさらに示す」ものとし、また「このことによって、その「前置き」を聞き手も共有したかどうか確認を求めることを常に必要とする」と定義している。だが、山口方言では上昇下降イントネーションを伴う文が話し手の発話ターンの最終部にあらわれても不自然ではないことや、上昇下降イントネーションを伴う文末形式にイネ（「～よねえ」に相当）などの発話のターンを保持しないものもあることから、上昇下降イントネーションには菅の定義の後半、すなわち当該の命題が表している情報について「聞き手も共有したかどうか確認を求める」機能があると定義しておく。

上昇下降イントネーションの機能をこのように考えると、上昇下降イントネーションによって文末詞ジャの意味・機能が「潜在的共有知識の活性化」に特定される理由について説明できるであろう。つまり、文末詞ジャが上昇下降イントネーションを伴うと、上昇下降イントネーションの「聞き手も共有したかどうか確認を求める」機能がはたらいて、ジャ

の多様な意味のうち話し手と聞き手とが同じ情報・知識を持っていることが前提となる「潜在的共有知識の活性化」に意味が限定されるのである。

ただし、(55) (56) (55') (56') のように「潜在的共有知識の活性化」には上昇イントネーションと上昇下降イントネーションの双方が適格となるのだが、そのニュアンスの違いなどについてはまだよくわからない。

3.2.5. 推量表現と文末詞ジャについて

3.1.でもふれたが、山口方言の文末詞ジャは推量形式にも後接する。文末イントネーションは上昇のみである。

(58) あの人も {行コージャ／行くジャロージャ} ↑。(行くだろうよ、ねえ)

(59) ＊あの人も {行コージャ／行くジャロージャ} ↑↓。

(58) は、話し手が自分の推量した事態について聞き手に述べるもので、特に驚きを表すこともない。また、必ず聞き手めあてでなければジャは推量形式と共起しないのだが、話し手の認識（話し手が推量した内容）に関して聞き手の認識（聞き手の推量した内容）と一致しているどうかを聞き手に尋ねたり、あるいは認識が一致するように働きかけたりする表現ではなく、三宅の分類で言えば「弱い確認要求」にあたるものといえる。標準語の「ね」と意味・機能上のちがいがあまりないと思われる文末詞ネとの置き換えが可能であることも、この裏付けとなるだろう。

(60) あの人も行くジャローネ↑。(行くだろうね)

推量表現と共起したジャが上昇下降イントネーションをともなわないのは、当該情報に関してその情報量（認識のありかた）が話し手＝聞き手であることを確認する機能を上昇下降イントネーションは持っているので、話し手だけがその心的活動の判断主体となる推量表現とは相容れないためだと考えられる。

ちなみに、いわゆる疑似モダリティは上昇下降イントネーションをともなっても不適格にならない（(61) ～ (63)）。以下のような疑似モダリティ形式を、話し手と聞き手に共有されるなんらかの証拠に基づく推論を表すものと考えると、共有できる認識の有無という点でも真正モダリティとのちがいが明確にできるだろう。

(61) あの人も行くミタイナジャ {↑／↑↓}。(行くみたいじゃないか)

(62) あの人も行きソーナジャ {↑／↑↓}。(行きそうじゃないか)

(63) あの人も行くカモシレンジャ {↑／↑↓}。(行くかもしれないじゃないか)

ただし、ネが後接する場合は上接下降イントネーションも適格となる。これは聞き手に同意を求めるネの意味・機能と上昇下降イントネーションの機能との問題なので、本稿ではこれ以上ふれない。

(60') あの人も行くジャローネ↑↓。(行くだろうね)

4. おわりに

以上述べたことの主要な点をまとめると、以下のようになる。

① 山口方言の文末にみられるジャには、断定辞と文末詞の二種がある。これらは、生起する文法的環境や音調、意味・機能の諸側面から区別できる。

①-1 断定辞のジャは、体言に後接し、文末イントネーションが下降となる。ただし、意味・機能の面で、標準語の断定辞「だ」と対応しない部分がある(2.1.)。

①-2 文末詞のジャは、体言にも用言にも後接し、文末イントネーションが上昇および上昇下降であり、標準語の「ではないか」に意味・機能の上でほぼ対応しているものである (3.1.)。

②-1 文末にあらわれる断定辞ジャの意味・機能は、標準語のそれと異なり、それまで話し手が認識していなかったある事態を、確定した事態として発話時に新規に導入したことを表す (2.2.1.)。

②-2 断定辞ジャは基本的には②-1 の意味・機能をもっているが、命令表現として語用論的に用いることもある (2.2.2.)。

③-1 文末詞ジャは標準語の「ではないか」のⅠ類にほぼ相当し、Ⅱ類にはジャナインが用いられる (3.2.2.)。また、ジャは意志や勧誘などのデオンティックな表現とは共起しない (3.2.3.)。これらのことから、ジャは形式的にも意味的にもジャナインやジャナイカネなどより文末詞として文法化がすすんだものと考えられる。

③-2 文末詞ジャが上昇下降イントネーションを伴う場合、上昇下降イントネーションが「聞き手も共有したかどうか確認を求める」機能をもつため、意味は「潜在的共有知識の活性化」に特定される。(3.2.4.)

最後に、山口方言の断定辞ジャが現在の用法をもつに至った経緯を考える際に有用だと思われる、山口方言の断定辞の古い意味・機能にふれておきたい。山口県大島郡出身の民俗学者である宮本常一の一連の著作のうち、山口県の大島（屋代島）での聞き取りや、大島からの移住者集落である対馬の浅藻部落での古老からの聞き取りなどの記録では、ナラティブで断定辞と思われるジャが多用されている。このことから、1950 年頃の山口東部方言（中・老年層）では断定辞ジャが現在とは異なる用法を持っていた可能性もある。今後、記述とは別に追究していきたいテーマである。

【注】

1) 単独では述語にならない名詞と結合して述語を作る形式を断定辞と定義する。なお、断定辞は指定辞、判定詞とも呼ばれるが、本稿では便宜上「断定辞」と呼ぶことにする。

2) ここで文末イントネーションと呼ぶ音調現象は、文末において語アクセント以外の理

由でピッチが上下するものをさすことにしておく。

3) 本稿では文末（主節末）にあらわれる断定辞のみを対象としたが、当然のことながら断定辞は文中（従属節内）でも用いられる。断定辞がジャという形式になるのは、以下に示した山口方言の断定辞の活用（用例の下線部）をみれば明らかなように、主節末と～ケドガ、～ケー、～シ等の文的独立性の高い従属節内だけである。

〈中止形・連用形〉デ

(64) 象形文字では、これが山デ、これが川だよ。

連用形としては、老年層には（65）のような使われ方があるが若年層は用いない。

(65) あそこは山デアリマス。

〈連体形〉ノ・ナ

(66) 山ノ（＝山である）場合は装備が必要だ。

(67) あそこはとても険しい山ナノニ、ザイルももたずに行ったのだろうか。

〈基本形〉ジャ

(68) そうか、この印は山ジャ。

(69) 今年の遠足は山ジャネ。

(70) ここは山ジャケドガ、そんなに不便でもない。（逆接）

(71) ここは山ジャケー、きのこがたくさんとれる。（順接）

(72) あっちは山ジャシ、こっちは川ジャシ、一体どっちなんだ。（並列）

なお、過去のタや条件のタラ、並列のタリなどにはジャで接続するが、この場合は「動詞連用形＋タ・タラ・タリ」という接続上の制限が優位になり、これによって断定辞連用形デと動詞アルの語頭が音融合を起こしてジャが成立し、アルの連用形促音便が保たれているものと考えられる。推量のジャローも同様で、断定辞連用形デと動詞アルの融合によって生じたものといえよう。

(73) むかし、あそこは山ジャッタ。

(74) 遠足は山ジャッタラいいのにね。

(75) あの村のあたりは深い山ジャロー。

4) 県外居住歴のない 19 歳男性は、「用事があるンチャ↑」を不自然としたが、「旅行に行くンチャ↑」あるいは「用事があるンチャ↑↓」ならば適格とした。聞き手は認識していないが話し手は認識している事態を聞き手に認識させようとする「～ンチャ↑」は、聞き手が予想だにしないような事態を話し手の特別な事情として説明するため、しばしば話し手の「自慢話」などの切り出しに用いられる。このため、「用事」では自慢にならないが「旅行」なら適格と判断されたのであろう。また「用事があるンチャ↑↓」は、上昇下降イントネーションによって「明日は用事がある」という情報を聞き手も共有したかどうかを確認する表現になったために適格と判断されたものと考えられる。

なお、「～ンチャ」の意味・用法の詳細については舩木（2000）を参照されたい。

5)　「打つだろう」という話し手の推量した内容を、驚きを含意せずに述べる表現である。標準語訳は困難なため、意訳として「打つだろうよ、ねえ」とした。

【参考文献】

秋山正次（1983）「熊本県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 9　九州地方の方言』国書刊行会

愛宕八郎康隆（1969）「奥能登珠洲方言の「デァ・ジャ・ヤ」」『國文學攷』49　広島大学国語国文学会

菅玲見（1999）「愛媛県松山方言における高接下降イントネーションの機能」『阪大社会言語学研究ノート』1　大阪大学文学部日本語学講座

郡史郎（1997）「日本語のイントネーション――型と機能――」杉藤美代子監修『――日本語音声 2――アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂

小西いずみ（1999）「富山県における指定辞デャ・ダ・ジャ・ヤの分布と変遷」『日本語科学』5

田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

橋本修（1992）「終助詞「ね」の、意味の型とイントネーションの型――長く急激な下降イントネーションの解釈を中心に――」『日本語学』11-12

藤田勝良・田原広史（1990）『山口県域の方言動態小報告――通信調査の結果による概観――』私家版

舩木礼子（2000）「山口方言の文末詞チャ」『阪大社会言語学研究ノート』2　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89

宮本常一（1984）『忘れられた日本人』岩波文庫

森山卓郎（1989）「文の意味とイントネーション」宮地裕他編『講座日本語と日本語教育 1 日本語学要説』明治書院

ふなき　れいこ（大阪大学大学院生）
funer@md.neweb.ne.jp